

## 帰り道で

ある日の学校からの帰り道のことだった。ぼくたちは、いつもの五人で帰っていた。

「うわっ。」

急にヤスオがさげんだ。見ると、ヤスオはあわててランドセルを下ろしてシャツの後ろを引っ張っている。サトシとトシヒサが後ろでくすくす笑っている。

「何か入ってる！取って。」

かけよって見てみると、葉っぱが背中にへばりついていて。サトシとトシヒサがいたずらしたのだ。シンゴが、笑いながらぼくに言った。

「葉っぱくらいで大きすぎだよな。なあ、ケンイチ。」

ぼくは、あいまいに笑ってうなずいた。

最近、こんなことがどうも多い。ぼくたち五人の中では、いつもシンゴがリーダーだ。いつ集まるかとか、何して遊ぶかなんかも、シンゴがたいてい言い出して決める。そうして五人で楽しく過ごしている。ところが、その中で決まって「イジられる」のがヤスオだ。からかわれたり、ちよつとしたことで文句を言われてせめられたりする。いたずらで物をかくされることもある。もちろんさがすとすぐ見つかるところにかくしてあるのだが、ヤスオのあわてる様子をみんなで笑いながら見ている。サトシやトシヒサが、シンゴの顔色を見ながらいつもそんないたずらをやっているのだ。

ぼくはと言えば、ずっと気になってはいるのだが、言えばシンゴがいやな顔をするかもしれないのでだまっていた。

「なあ、今日の放課後、四人でゲームしよう。」

休み時間にトシヒサが言ってきた。

「いいけど。四人でするの。」

「ヤスオぬきでやろう。ヤスオ、ゲームも下手だし、四人の方が面白いだろ。シンゴもそう言ってるし。ヤスオには言うなよ。」

その日の帰り道、いつもの五人で帰っているとヤスオが言った。

「今日は何して遊ぶ？」

「いや、今日は用事があるから無理。なあ、みんな。」

サトシがみんなの顔を見回しながら言った。

「そう、分かった。」

ヤスオがそう言う声を聞いたとき、とうとうぼくはがまんできなくなつた。「なあ、みんなでゲームしようよ。五人でさ。いいだろ。」

目のはしにシンゴのおどろいた顔がうつつた。サトシとトシヒサはシンゴの方をうかがっている。

「別にいいけど……。なあ。」

サトシとトシヒサを見ながらシンゴが言った。ぼくはほつとした。

その日、帰ってから、ぼくたち五人は公園に集まってゲームをした。ぼくは、ゲームをしながらヤスオの顔を見たが、ヤスオが何となく暗い顔をしているのが気になった。

次の日、ぼくはトシヒサに声をかけた。

「なあ、今日も放課後、ゲームする？」

「いや、今日は用事あるから無理。なあ、サトシ。」

サトシを見ながらトシヒサが言った。少し離れたところで、シンゴが笑いながらこつちを見ていた。

その日から、ぼくはみんなと遊ばなくなつた。というより、さそわれなくなつた。学校でも、その四人と過ごすことはなくなつたのだつた。帰りも、少し離れて歩くぼくの前で、四人が何だかんだとおしゃべりしたり遊ぶ相談をしている。そう言えば、ヤスオはあまりからかわれなくなつたようだ。別れぎわ、一人で歩くぼくを、ヤスオがちらりと悲しそうな目でふり返つた。

ぼくが家に着くと、ヤスオから電話がかかつてきた。

「ケンイチ君、ごめん。みんなでケンイチ君のこと、無視することになつていて……。ぼく、ぼく、何か言うと、またいやなことされるし……。ごめん……。」

その日の夜、たまらなくなつたぼくは、お母さんに話をした。だまって聞いていたお母さんは、にっこりと笑つて、そして言った。

「ケンイチ、お母さんはあなたのお母さんでよかつたわ。ちゃんとヤスオ君をさそつたあなただね。なかまはずれなんて気にしない。はずされても、はずすよりずっといい。いじめられても、いじめるよりずっといい。何が正しくて何がまちがつてるかは、ちゃんとだれかが見てるのよ。おばあちゃんもよく言ってるでしょ。おてんとさまが見てるってね。」

ぼくは、この数日ずっと重たかつた心が、すつと軽くなつていくような気がした。



翌日は、さわやかな青空だつた。空の上からだれかが、おてんとさまが、ぼくのことをちゃんと見てくれてるんだと思いつながら、ぼくは空を見上げた。目のはしに、ヤスオがこつちに向かって歩いてくる姿が見えた。

○ ほつとしたとき、ケンイチはどんなことを思つたでしょう。

○ たまらなくなつて母に話をしたケンイチは、どんな思ひでいたでしょう。

○ ケンイチが、重たかつた心が軽くなつていくような気がしたのは、どうしてでしょう。

